九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本語学習者による多義動詞を中心語とするコロケーションの習得

大神, 智春

https://hdl.handle.net/2324/1959200

出版情報：Kyushu University, 2018, 博士（芸術工学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

（様式６－２）

氏　　名	大神　智春
論　文　名	日本語学習者による多義動詞を中心語とするコロケーションの習得
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　板橋　義三 副　査　　九州大学　　教授　　郭　俊海 副　査　　九州大学　　准教授　　中村　美亜

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

従来、日本語のコロケーション研究については誤用分析や誤用原因の探求したものがほとんどであったのに対して、本論文はコロケーションを日本語学習者がどのように中間言語を形成して習得しているのかという、直接的な問題について解明を試みた非常に意欲的な論文である。

本論文は８章からなるが、その中心となる章は第３章から第７章であり、多義動詞「Xをとる」という特定の統語形式に基き、多義語の意味的構造に焦点を当て、この多義語で形成されているコロケーションの習得について研究がすすめられた。第３章では、日本語テキストにおける扱いと学習者母語の辞書による説明について詳細でかつ定量的・定性的に問題を掘り起こしたものであり、第４章では、日本語母語話者のこの形式に対するプロトタイプを確定した。第５章で日本語学習者の典型化（プロトタイプ）の状況を明らかにし、第６章で日本語学習者の一般化（多義性理解）の状況について解明し、最後に第７章で差異化（類義性理解）の状況を明らかにし、第５章から７章までについては日本語母語話者との比較も含めて論じた。終章の第８章で結論、日本語教育への提言、そして今後の課題をまとめた。

本研究の全般的貢献としては、コロケーションの習得研究を進めるにあたって、この研究領域では初めて概念形成理論を適用し、名詞だけではなく、動詞においても本理論が適用できることを実証したことが挙げられる。また、日本語教育への提言として、本研究はコロケーションの深さ、広さ、そしてネットワーク知識を意識して語の選定を行うことができるよう、学習者に与える契機作りとして考えることができ、特に超級の学習者向けの漢字や語彙教材開発の必要性を主張し、その具体的教育活動に繋げた点も非常に評価できる。

また、個々の研究成果として本論文で初めて解明されたことは、以下の点である：①学習者の形成する中間言語の「典型化」において学習者のプロトタイプは日本語母語話者が考えるプロトタイプと必ずしも一致するわけではなく、テキストや授業で得た学習知識を基盤に、日常生活で得た言語知識を照合しつつ形成した「学習基本義」が存在し、それを基礎としてプロトタイプを形成していくとした、卓越した見解を示した。②「一般化」である語彙知識の多様性の習得はテキスト等の用例や日常生活に密着して使用される語彙を基盤しているため限定的にしか習得できない点を指摘すると同時に、学習者が徐々に「一般化」を深化させていることを明らかにした。③中間言語の「差異化」においては「Xをとる」と「Xをもつ」「Xを得る」の語彙知識の広がりとネットワーク知識の発達による、差異化習得の状況を解明するとともに、その習得は非常に点的・断片的であり、まだあまり面的・空間的な広がりがないことも明らかにした。

それぞれの審査員からの本発表と論文に対する評価は非常に高く、大神氏のこれまでの研究成果の総括と更に発展させた内容というべきものである。

本論文は、従来の日本語コロケーションの習得研究を大きく前進させた、貢献度の著しく高い、優れた論文であり、学位（芸術工学）論文に相応しいものであることを確認した。